

母親の養育態度に関する研究

—母親自身の愛着スタイルと自己受容に焦点をあてて—

武内 珠美・田井中 華恵・河野 伸子

Research into Nurturing Attitudes of Mothers

—Focusing on attachment styles and self-acceptance of mothers—

TAKEUCHI, T. , TAINAKA, H. , and KAWANO, N.

大分大学教育福祉科学部研究紀要 第36巻第1号

2014年4月 別刷

Reprinted From

THE RESEARCH BULLETIN OF THE FACULTY OF

EDUCATION AND WELFARE SCIENCE,

OITA UNIVERSITY

Vol. 36, No. 1, April 2014

OITA, JAPAN

母親の養育態度に関する研究

—母親自身の愛着スタイルと自己受容に焦点をあてて—

武内 珠美*¹・田井中 華恵*²・河野 伸子*³

【要 旨】 本研究では、母親自身の愛着スタイル、自己受容が母親の養育態度にどのように影響を与えているかを明らかにするために、乳幼児を持つ母親 117 名を対象に、「愛着スタイル」、「自己受容」、「養育態度」について質問紙調査を実施した。その結果、愛着スタイルが自己受容に影響を与えており、また愛着スタイルと自己受容が養育態度に影響を与えていることが明らかとなった。さらに、自己受容因子の中では、母親としての自分を受け入れることや自分自身の内面を受け入れることが、子どもに受容的・応答的に関わる態度に影響していることが示された。これらの結果より、子育て支援の際に母親を取り巻く環境に目を向けるだけでなく、母親自身の抱える問題にも目を向けて支援を行っていくことの重要性が示唆された。

【キーワード】 養育態度 愛着スタイル 自己受容

I 問題・目的

現代の日本の社会は、核家族化や地域のつながりの希薄化等により、家庭や地域の中で子育ての知恵や経験を共有することが難しく、子育てに周囲の手助けを求めにくくなっている状況である。また、長時間労働等により父親の家事・育児への関わりが十分でない中で、子育てが孤立化し、母親の負担感が大きくなっている(厚生労働省, 2007)。特に母親の持つ育児不安・ストレスは深刻な問題の一つであり、育児不安・ストレスの長期化は母親自身の精神衛生を悪化させるだけでなく、子どもへの悪影響やさらには幼児虐待等につながる事が考えられる(森下, 2001)。さらに、長谷川(2008)によると、虐待に関する調査の初期から現在まで、一貫して実母による虐待が全体の 60%を占めているという。これらを踏まえると、育児期の母親に対する子育て支援の必要性は高いと考えられる。

また、親の養育態度が子どものパーソナリティ形成や行動に深く関わっていることが明らかになっている(桜井・大川, 1994; 中台・金山・前田, 2004)。母親の養育態度と乳幼児の身体発育の関係性を検討した宮原・北村(1993)は、母親の養育態度と乳幼児の身体発育は相互に関

平成 25 年 10 月 31 日受理

*1 たけうち・たまみ 大分大学教育福祉科学部心理学教室

*2 たいなか・はなえ 大分大学大学院教育学研究科学校教育専攻臨床心理学コース

*3 かわの・のぶこ 大分大学教育福祉科学部心理学教室

連し、特に3歳以降では過度な拒否的態度と低発育は相互に関連することを示している。また戸田(1998)は、親の養育態度と、幼児の社会的行動(特に攻撃的行動)との関係を検討している。その結果、父親の権威的な養育態度(特に説得的な養育態度)は、幼児の園での破壊的行動やいじめと関係があることが明らかになった。これらの先行研究より、親の養育態度が子どもに与える影響は大きいと考えられる。

以上のことより、子育て支援について考える上で、養育者の養育態度に影響を与える要因や、その要因がどのように養育態度に影響しているかを明らかにする必要があると考えられる。しかし、養育者の養育態度が子どもに与える影響について検討した研究は多く存在する一方で、養育者の養育態度の規定要因に関連する研究は少ない(末森, 2007)。田淵(1993)は、母親の養育態度に影響を与える要因として、母親自身の出生順位、学歴、親から受けたしつけの認知、パーソナリティ、夫婦関係、子どもの出生順位等の様々なものの存在を挙げている。この研究より、養育態度に関係する要因は数多く存在するということが考えられる。

さらに、稲垣・渡邊(2007)は、母親の養育態度と内的作業モデル(*Internal Working Models*; IWM)や自己受容との関連について研究している。IWMとは、初期の養育者との関係に基づいて形成される子どもの自己や他者に対する表象のことである。安定した愛着の中で成長した子どもは、「自分は他者から愛される存在である」「他者や世の中は自分を受け入れてくれる、信頼に値する存在である」というIWMを形成する。一方、不安定な愛着の中で成長した子どもは、「自分は愛されるに値しない存在である」「他者や世の中は自分を拒否する、信頼できない存在である」というIWMを形成する(桜井・大川, 前出)。そして獲得されたIWMに基づき、典型的な愛着スタイルが形成され(立丸・中谷・堀・大塚, 2010)、IWMは生涯にわたって作用すると考えられている。

稲垣・渡邊(前出)の研究では、乳幼児を持つ母親247名を対象に、養育態度のIWM、対人関係のIWM、過去の母親・父親との被養育経験IWM、現在の母親・父親との関係のIWM、自己受容(現在の自分について「私は自分の欠点や短所も含めてありのままの自分を受け入れることができる」に対する5段階評定とその理由を自由記述で行うもの)の関連を検討している。その結果、対人関係のIWMが「安定型」であると、養育態度は子どもに対して共感的であり、自己の捉え方は、適度な自己肯定感がみられ、さらには、自己理解や洞察も深まっていた。対人関係のIWMが「アンビバレント型」であると、養育態度は不安定で関わりが乏しい、または過剰に関わるというものであり、自己嫌悪が強く、不安定であった。対人関係のIWMが「回避型」であると、養育態度は、養育に対して否定的で、分離不安や育児不安を抱えており、自己に対して否定的で自己洞察も低いということが分かった。この先行研究から、母親自身の愛着スタイルや自己受容も養育態度に影響を与える要因の一つとして考えることができる。

また、稲垣・渡邊(前出)の研究における養育態度のIWMとは、母親の実際の養育行動や経験を問うものではなく、母親が主観的ないかなる表象モデルを有しているかを評定するものである。さらに、自己受容を自己の経験や感情を防衛的にならずありのまま受け入れることであるとし、具体的な自己項目に対する受容ではなく、全体的な自己の受容について回答を求めている。しかしながら、母親の実際の養育態度を問うことや、母親の自己を構成する身体的な自己や性格的な自己等の各側面に注目し、それぞれの受容について問うことは、母親をより詳細に捉えるために有効であると考えられる。

従って本研究では、主な養育者である母親を対象とし、愛着スタイル及び自己受容が母親の

養育態度に与える影響を明らかにすることを目的とする。そして養育態度に関しては、母親が実際に子どもに取っている態度について回答してもらい、自己受容に関しては、定義を「自分のあるがまま、ありのままを受け入れること」とし、母親の自己の各側面における受容について回答してもらう。また今回は、母親の自己受容には、母親が一人の人間として、自分のことをどのように受け止めているかということだけではなく、母親としての自分をどのように感じ、受け止めているかという、母親役割における自己受容も含めて考えるため、「母親としての自己」の受容についても回答してもらう。

これらを明らかにすることによって、子どもに対して適切でない養育態度を取ってしまうなどの子育てに困りを抱えた母親を支援する際、母親を取り巻く要因にばかり目を向けるのではなく、母親自身が抱える問題に目を向け、様々な角度から問題を捉えて支援していく重要性を示すことができると考えられる。また、被虐待児の内、乳幼児の占める割合は全体の42%であり(厚生労働省, 2006)、さらには乳幼児期は第1反抗期を迎える時期であるため、母親もストレスを抱きやすいと推察されることから、今回は乳幼児を持つ母親を対象とする。

II 方法

1 調査協力者

調査協力者は、A市内の保健センターで行われる1歳6か月児健康診査に来ていた母親260名である。その内、120名から回答を得た(回収率46%)。不備を除いたものは117名分であり、それらを分析対象とした。

2 手続き

2012年8月上旬～11月中旬に、A市内の5か所の保健センターに1歳6か月児健康診査に来ていた母親に対して、研究の主旨・内容について説明した上で質問紙が入った封筒を渡し、自宅で質問紙に回答してもらった。そして後日大学に郵送してもらうという方法で質問紙の配布・回収を行った。

3 調査内容

1)回答者の基本属性

子どもとの関係性、年齢、子どもの人数、子どもの出生順位、子どもの性別

2) 戸田(1988) 内的作業モデル尺度(18項目、6段階評定)

個人が他者と自分の関係をどのようなものとして捉えているかについて、アタッチメント理論の観点から測定する尺度で、第1調査(詫摩・戸田, 1988)で選定した18項目に若干の修正、追加を行い、学生以外のサンプルも含めたより大きなサンプルを用いて作成されている。18項目に対して、「非常によくあてはまる」(6点)、「あてはまる」(5点)、「ややあてはまる」(4点)、「あまりあてはまらない」(3点)、「あてはまらない」(2点)、「全くあてはまらない」(1点)の6件法で回答を求めた。

3)自己受容尺度(35項目、5段階評定)

自己受容測定尺度(沢崎, 1993)の役割的自己項目である、「男または女としての自分」「親に対する子どもとしての自分」「兄弟の一員としての自分(一人子の場合も含む)」の3項目を「母

親としての自分」「家事をする自分」「子育てをする自分」に変更して新たに作成した。35項目に対して、「それでまったくよい、そのままよい」(5点)、「それでまあまあよい、それでもまわらない」(4点)、「どちらでもない、わからない」(3点)、「それでは少しいやだ、少し気になる」(2点)、「それではまったくいやだ、気に入らない」(1点)の5件法で回答を求めた。

4) 養育態度尺度(20項目, 4段階評定)

「親の養育態度尺度」(中道・中澤, 2003)を元に、養育態度を「応答性」と「統制」の2次元に基づいて新たに作成した。20項目に対して、「びったりあてはまる」(4点)、「だいたいあてはまる」(3点)、「あまりあてはまらない」(2点)、「ぜんぜんあてはまらない」(1点)の4件法で回答を求めた。なお、回答は1歳6か月児健康診査に連れてきている子どもについて行ってもらった。

4 分析方法

まず各尺度の下位構造を明らかにするために、因子分析を行った。その後、愛着スタイル及び自己受容が母親の養育態度に与える影響を明らかにするために、重回帰分析を組み合わせたパス解析を行った。これら一連の分析にはStatistica 03 Jを用いた。

III 結果・考察

1 各尺度の下位構造

各尺度の下位構造を明らかにするために、それぞれに因子分析を行った。各因子の解釈にあたっては、因子負荷量の絶対値が0.4を超える項目を採用し、各因子に十分な負荷量を示さない項目や、複数の因子に対して負荷量を示しているものは除外した。

1) 内的作業モデル尺度

因子分析(主因子法・正規化バリマックス回転)を行った(表1)。解析の結果、18項目から構成される3因子を抽出した。第1因子に高く負荷している項目は、「私はすぐに人と親しくなるほうだ」、「私は知り合いがでやすいいほうだ」などの人と安定した関係を築くことができる6項目であったため、『安定型』と命名した。第2因子に高く負荷している項目は、「あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう」、「どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれしい態度をとられると嫌になってしまう」などの、対人関係における回避的な傾向を示す6項目であったため、『回避型』と命名した。第3因子に高く負荷している項目は、「人は本当はいいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある」、「時々友達が、本当は私を好いてくれているのではないかとか、私と一緒にいたくないのではと心配になることがある」などの不安や自信のなさを示す6項目であったため、『アンビバレント型』と命名した。これらの3因子の構造は、戸田(1988)の先行研究と同様のものであった。

また、「安定型」の尺度平均得点は20.7(1項目あたり平均3.45, SD=0.75)である。このことは、今回の調査対象者の多くが、安定型のIWMが、「ややあてはまる～あまりあてはまらない」の範囲に含まれることを示している。「回避型」の尺度平均得点は17.6(1項目あたり平均2.93, SD=0.82)である。このことは、今回の調査対象者の多くが、回避型のIWMが「あまりあてはまらない～あてはまらない」の範囲に含まれることを示している。「アンビバレント

型」の尺度平均得点は 17.9(1 項目あたり平均 2.98, SD=0.83)である。このことは、今回の調査対象者の多くが、アンビバレント型の IWM が「あまりあてはまらない～あてはまらない」の範囲に含まれることを示している。

以上の結果を踏まえると、調査対象者となった母親の IWM の傾向として、他者との関係を持つことに自信を失って極度に回避することもなく、適度な距離を持ちながら他者と関わっていく自己の姿を認知していることがうかがえる。

表 1. 内的作業モデル尺度に対する因子分析結果
(主因子法・正規化バリマックス回転)

項目	F1	F2	F3
F1:安定型(6 項目 $\alpha=.836$, 尺度得点平均 20.7, SD=4.50)			
私は知り合いが得意やすいほうだ。	-.75	.01	.03
私はすぐに人と親しくなるほうだ。	-.71	-.08	-.02
私は人に好かれやすい性質だと思う。	-.65	-.06	-.38
気軽に頼ったり頼られたりすることができる。	-.65	-.23	-.06
初めて会った人とでもうまくやっていける自信がある。	-.64	.03	-.15
たいていの人は私のことを好いてくれていると思う。	-.62	.00	-.31
F2:回避型(6 項目 $\alpha=.775$, 尺度得点平均 17.6, SD=4.92)			
あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう。	.12	.70	.15
どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれしい態度をとられると嫌になってしまう。	.05	.64	.07
あまり人と親しくなるのは好きではない。	.35	.64	.23
人に頼るのは好きでない。	.05	.57	-.01
人は全面的には信用できないと思う。	.08	.54	.34
私は人に頼らなくても、自分 1 人で充分にうまくやって行けると思う。	-.18	.49	.01
F3:アンビバレント型(6 項目 $\alpha=.841$, 尺度得点平均 17.9, SD=4.98)			
人は本当は、いやいやながら、私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある。	.10	.19	.81
時々友達が、本当は私を好いてくれていないのではないかとか、私と一緒にいたくないのではと心配になることがある。	.13	.19	.71
あまり自分に自信がもてないほうだ。	.39	.12	.65
ちょっとしたことで、すぐに自信をなくしてしまう。	.37	.28	.60
自分を信用できないことが良くある。	.15	.38	.54
私はいつも人と一緒にいたがるので、ときどき人からうとまれてしまう。	-.05	-.12	.52
説明済分散	3.23	2.54	2.98
寄与率	.18	.14	.17

2)自己受容尺度

因子分析(主因子法・正規化バリマックス回転)を行った(表 2)。解析の結果、20項目から構成される3因子を抽出した。第1因子に高く負荷している項目は、「思いやり」、「やさしさ」などの精神的な自己を表す8項目であったため、『精神的自己』と命名した。第2因子に高く負荷している項目は、「体つき」、「性的能力(魅力)」などの身体的な自己を示す8項目であったため、『身体的自己』と命名した。第3因子に高く負荷している項目は、「母親としての自分」、「子育てをする自分」などの、母親としての自己を表す4項目であったため、『母親としての自己』と命名した。

また、「精神的自己」の尺度平均得点は28.1(1項目あたり平均3.51, SD=0.70)である。このことは、今回の調査対象者の多くにおいて、精神的自己の受容が「それでまあまあよい、それでかまわない〜どちらでもない、わからない」の範囲に含まれることを示している。「身体的自己」の尺度平均得点は26.6(1項目あたり平均3.33, SD=0.69)である。このことは、今回の調査対象者の多くにおいて、身体的自己の受容が「それでまあまあよい、それでかまわない〜どちらでもない、わからない」の範囲に含まれることを示している。「母親としての自己」の尺度平均得点は14.2(1項目あたり平均3.55, SD=0.86)である。このことは、今回の調査対象者の多くにおいて、母親としての自己の受容が「それでまあまあよい、それでかまわない〜どちらでもない、わからない」の範囲に含まれることを示している。

以上より、調査対象者になった母親の自己受容の傾向として、自分の性格的な面や身体的な面、また母親としての面を比較的受け入れている状態にあることがうかがえる。

表 2. 自己受容尺度に対する因子分析結果
(主因子法・正規化バリマックス回転)

項目	F1	F2	F3
F1: 精神的自己(8項目 $\alpha=.884$, 尺度得点平均 28.1, SD=5.58)			
思いやり	.77	.14	.20
やさしさ	.71	.14	.30
まじめさ	.68	.06	.15
忍耐力 (がまんする力)	.68	.07	.16
明るさ	.63	.36	.22
責任感	.63	.14	.17
協調性 (人との関係がうまくやれること)	.58	.29	.11
情緒安定度 (気持ちがいつも落ち着いていること)	.55	.29	.31
F2: 身体的自己(8項目 $\alpha=.804$, 尺度得点平均 26.6, SD=5.50)			
性的能力 (魅力)	.26	.71	.27
年齢	.01	.61	.09
体つき	.30	.57	.16
知性 (学力)	.24	.54	.19
運動能力	.22	.53	.20
過去の自分	.29	.50	.18
性別	.01	.47	-.03
経済状況	.05	.47	.25
F3: 母親としての自己 (4項目 $\alpha=.902$, 尺度得点平均 14.2, SD=3.45)			
子育てをする自分	.26	.20	.85
母親としての自分	.30	.22	.83
家事をする自分	.35	.16	.68
現在の自分	.23	.32	.66
説明済分散	4.16	3.05	2.96
寄与率	.21	.15	.15

3) 養育態度尺度

因子分析(主因子法, バリマックス回転)を行った。解析の結果, 12項目から構成される2因子を抽出した(表3)。第1因子に高く負荷している項目は, 「どこかに出かけて, 子どもが疲れていると感じた時, 休んだり, 子どもを抱っこする」, 「子どもが怖がっている時は, 安心させてあげる」などの, 子どもに対する応答性や受容性を示すものであったため, 「愛情深い関わり」と命名した。第2因子に高く負荷している項目は, 中道・中澤(2003)の「親の養育態度尺度」に筆者が付け加えた, 「子どもの行儀を良くするために, 罰を与えることや, しかることがある」, 「子どもが悪いことをした時には, しかる」という, 子どもに対するしつけの態度を表すものであったため, 「しつけの関わり」と命名した。

また, 「愛情深い関わり」の尺度平均得点は 28.0(1項目あたり平均 3.5, SD=0.35)である。このことは, 今回の調査対象者の多くにおいて, 愛情深い養育態度が「ぴったりあてはまる～

だいたいあてはまる」の範囲に含まれることを示している。次に「しつけ的関わり」の尺度平均得点は12.4(1項目あたり平均3.1, SD=0.54)である。このことは、今回の調査対象者の多くにおいて、しつけ的な養育態度が「ぴったりあてはまる～だいたいあてはまる」の範囲に含まれることを示している。

以上の結果より、調査対象者となった母親の養育態度の傾向として、子どもに受容的・応答的な関わりも、しつけ的な関わりもある程度行っていることがうかがえる。

表3. 養育態度尺度に対する因子分析
(主因子法, バリマックス回転)

項目	F1	F2
F1:愛情深い関わり(8項目 $\alpha=.791$, 尺度得点平均 28.0, SD=2.77)		
子どもが怖がっている時は、安心させてあげる。	.65	.09
子どもを抱きしめたり、やさしい言葉をかけて愛情を示している。	.63	.04
どこかに出かけて、子どもが疲れていると感じた時、休んだり、子どもを抱っこしたりする。	.62	.14
あなたが家にいる時、子どもと一緒に過ごす時間を持っている。	.60	.03
子どもと、いろいろなことを一緒にすることは、あまりない。	.57	.06
子どものことに、十分気を配っている。	.52	.10
子どもが一人で遊んでいて、退屈そうだなと思った時、加わって一緒に遊ぶ。	.51	-.05
子どもと一緒に外出することがある。	.44	.33
F2:しつけ的関わり(4項目 $\alpha=.704$, 尺度得点平均 12.4, SD=2.17)		
子どもが悪いことをした時には、しかる。	.19	.73
子どもが人に迷惑をかけた時は、しかる。	.13	.69
子どもが、すべきことをちゃんとするまで、何回も指示する。	-.14	.58
子どもの行儀を良くするために、罰を与えることや、しかることがある。	-.12	.54
説明済分散	2.69	1.80
寄与率	.22	.15

2 重回帰分析を組み合わせたパス解析

母親の愛着スタイル・自己受容が、母親の養育態度に与える影響を検討するために、パス解析を行った。想定した因果関係は、1) 幼少期に育まれた内的作業モデルに基づいて形成された愛着スタイルが存在する、2) 愛着スタイルによって、自己受容の度合いが異なってくる、3) その自己受容の度合いによって、養育態度が変化してくる、というものである。これら変数の因果関係を、従属変数と独立変数のレベルから、(1)愛着スタイル(3変数)、(2)自己受容(3変数)、(3)養育態度(2変数)の3段階に設定した。

解析は、重回帰分析によって行い、第3水準の2変数を基準変数にして第1第2水準の変数を説明変数にする解析と、第2水準の3変数を基準変数にして第1水準の変数を説明変数にする解析を行った。解析の結果を、図1のパス・ダイアグラムに示す。矢印は有意なパスを示し、数値は標準偏回帰係数を示す。

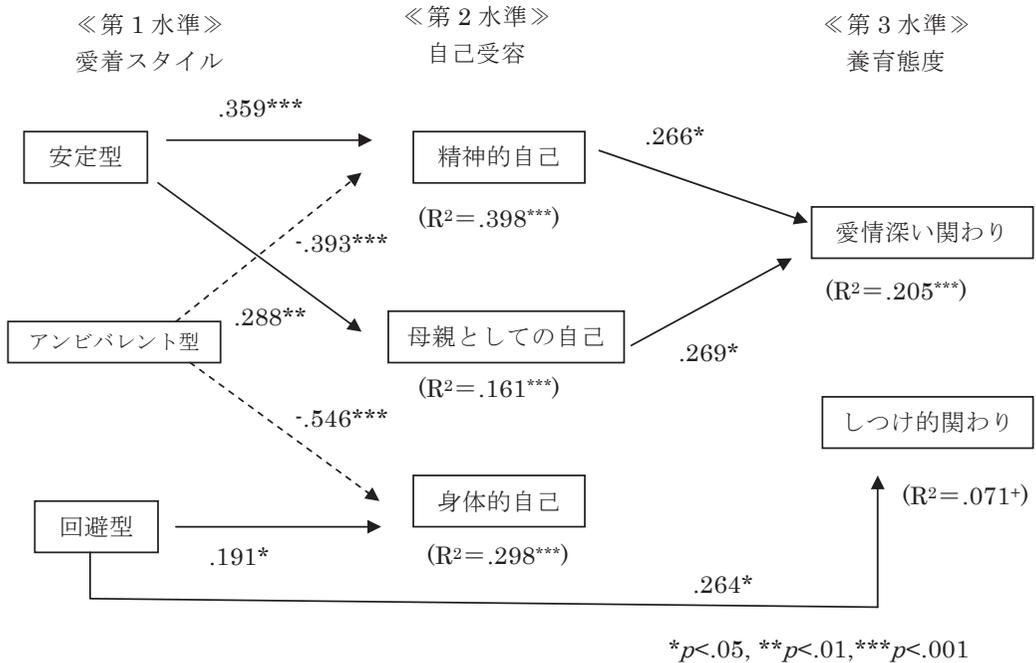


図 1. 母親の養育態度に関わる変数間の関係 (パス・ダイアグラム)

注 1: 各変数の数値は自由調整済みの R² の値で、各パスの数値は標準偏回帰係数の値である。

注 2: 実線は正、点数は負のパスを示す。

分析の結果から、養育態度の「愛情深い関わり」の生起に影響している要因は、自己受容項目の「母親としての自己」と「精神的自己」であることが示唆された。また、これらの要因には、愛着スタイルが「安定型」であることが影響を与えていることがわかった。江口 (1987) の研究においても、自己受容の高い、内的に安定した母親は、より適切な養育態度を示すことが明らかになっている。さらに、田邊・米澤(2009)の研究でも、対人関係において安定し、感受性や応答性が高いと自分自身のあるがままの姿を受け入れ、自信を持つことができるという結果が示されている。このことより、安定した IWM を形成していることによって、自分の内面の特性を受け入れることができ、そのことから生じた自信・安心などによって、母親が安定するために、子どもと受容的・応答的に関わるようになるのではないかと考えられる。さらに、「精神的自己」に愛着スタイルの「アンビバレント型」から負の影響が出ていた。これは、不安定な IWM を元に形成された安定しない対人関係の取り方によって、不安・自己否定感が生じ、自分の内面の特性を受け入れることができないためではないかと考えられる。

また、「身体的自己」からは養育態度への影響はみられなかったことから、子どもに対して受

容的・応答的に関わるには、身体的な側面を受け入れることよりも、より自分の内側の側面である精神的な特性や、母親としての自分を受け入れることの方が大切であるということが示唆された。

さらに、「しつけ的関わり」に影響を与えているのは、愛着スタイルの「回避型」であった。「回避型」の項目を見ると、「人に頼るのは好きでない」、「人は全面的には信用できないと思う」というように、人を信用できない、人に迷惑をかけてはいけないと考えているため、自分の子どもに対しても人に頼らずに生きていけるように、しつけ的な関わりを行うのではないかと考えられる。また、自己受容のどの因子からも「しつけ的関わり」に影響が出ていなかった。このため、子どもを育てるために必要な「しつけ的関わり」は、母親の内的な受容とは関係せず、他の要因と関係していることが推測される。

IV 今後の課題

本研究では、母親の自己受容の一部である、母親としての自分を受け入れることが、子どもと受容的・応答的に関わる態度に影響を及ぼしていることが明らかとなった。これまでの母親の自己受容についての研究では、母親役割における自己受容の重要性を示したものはほとんど見られなかった。しかし、今回の研究によって母親としての自分を受け入れることが、自己受容の因子の中では強く子どもと受容的・応答的に関わる態度に影響していると示唆されたため、今後母親の自己受容と養育態度に関する研究を行う場合は、この母親としての自分を受け入れることに焦点を当てて研究を進めていきたい。また今後母親に質問紙を実施する場合は、質問紙の量や内容をさらに吟味していく必要があると考える。

ところで、今回調査に協力して頂いた母親の愛着スタイルはある程度安定し、自分の身体的側面・精神的側面・母親としての側面も比較的受容しており、子どもに対しても愛情深くも統制的にも関わっていることがわかった。よって、本研究で明らかになった結果は、ごく限られた母親を対象にして得られたデータである。しかし、このデータは一般的な母親の典型的な傾向を表していると考えられるため、今後は問題を抱えた母親を含む調査を行い、愛着スタイルや自己受容が養育態度に及ぼす影響をより鮮明に検討していく必要があると考えられる。

また、近年虐待への影響が大きいと考えられている愛着の型に「無秩序・無方向型」がある。この型は Main&Solomon によって提唱されているが、今回使用した戸田(1988)の尺度ではこの新しい型は取り入れられてはいなかった。さらに、本研究では母親1人1人の愛着スタイルの型を出していないため、この研究における愛着スタイルの型とは、母親が持っている愛着スタイルの傾向を示していると考えられる。これらを踏まえて、今後「無秩序・無方向型」も加えた、母親の愛着スタイルの型を検討する必要があると考えられる。

さらに、今回の研究では、愛着スタイル・自己受容に影響を与える要因を明らかにすることは出来なかったが、稲垣(2010)の研究によると、母親の愛着スタイルの型が不安定型である場合、子どもに問題が生じやすく支援が必要であるが、その母親との関係作りの難しさや、支援を行っても悩みが減少しにくいといった対応の難しさが予測されると述べられている。また、鎌田・石原・川村(2007)の研究においても、愛着スタイルが安定傾向の母親は、困難が生じた時にはいつでも専門職に対して自ら援助を求めようとする態度を持っていることが示されている一方で、不安定な愛着スタイルを持つ母親は、専門職の相談への信頼感や相談意欲が低く、

専門職に子育ての相談をするのは難しいと考えている人が多かったと示されている。これらの結果を踏まえると、不安定型の母親達の支援においては、まず専門職が信頼できると感じさせることが必要であると考えられる。そのために、産婦人科や乳幼児健診等の早い段階で母親と関わり、その後も長期的に援助していくことが重要ではないかと思われる。また専門職に自ら援助を求めることが難しい母親もいるため、保育園や幼稚園という日常場面で母親と関わることも重要であると考えられる。

以上の点を踏まえ、今後は、子どもに受容的・応答的に関わる態度に影響を与える要因である、母親としての自分を受け入れることを促進・後退させる要因について、詳しく検討し、具体的な支援を考察することが必要であると考えられる。また、今回の研究は量的なものであったため、今後は母親の養育態度に影響を与える要因について、質的な研究を進めていくと同時に事例実践を行って行く必要があると考えられる。

謝辞

本論文は、第2筆者が卒業論文研究として収集したデータをもとに作成いたしました。そこで、まずは調査ご協力のお返事を下さった保健所センター長をはじめ、保健センターの皆さま、家事や育児、仕事に忙しい中、質問紙調査に協力くださったお母様方に心より御礼申し上げます。そして、卒業論文研究を行うにあたって、多大なるご指導をくださった教育心理学選修・心理分野の諸先生方に御礼申し上げます。

引用文献

- 稲垣千代 (2010). 母親の愛着スタイルと子育て支援 家庭教育研究所紀要, 32, 190-203.
- 稲垣千代・渡邊孝憲 (2007). 母親の養育態度と内的作業モデルとの関連について 家庭教育研究所紀要, 29, 16-28.
- 江口昇勇 (1987). 障害幼児を持つ母親の研究—自己受容とカウンセリングをめぐる— 同朋大学論叢, 57, 154-131.
- 鎌田佳奈美・石原あや・川村千恵子 (2007). 乳幼児をもつ母親の内的ワーキングモデルと社会支援に対する態度との関連 大阪府立大学看護学部紀要, 13(1), 1-8.
- 厚生労働省 (2007). 地域子育て支援拠点事業 実施のご案内(実施ガイド)
- 桜井茂男・大川一郎(編著) (1999). しっかり学べる発達心理学 福村出版, 96-97, 111-113.
- 立丸恵・中谷隆・堀匡・大塚泰正 (2010). 女子大学生における愛着スタイルとストレスコーピングならびに精神的健康との関連 心理臨床学研究, 28, 3, 336-340.
- 田邊恭子・米澤好史 (2009). 母親の子育て観からみた母子の愛着形成と世代間伝達—母親像に着目した子育て支援への提案— 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, No.19, 19-28.
- 田淵創 (1993). 母親の養育態度に影響を及ぼす要因の検討(II) 川崎医療福祉学会誌, Vol.3, No.2, 35-45.
- 戸田須恵子 (1998). 父親の養育スタイルと、子どもの攻撃的行動に関する研究 北海道教育大学紀要教育科学編, 49, 63-78.
- 中台佐喜子・金山元春・前田健一 (2004). 母親の養育態度が幼児の問題行動に及ぼす影響—養育態度→家庭における問題行動→園における問題行動というプロセスの検討— 広島大学心理学

- 研究, 4, 151-157.
- 長谷川麻衣 (2008). 母親の育児ストレスと母子関係—縦断研究による検討— 発達研究, 22, 37-48.
- 末森慶 (2007). 思春期の子どもに対する親の養育行動に関する研究の概観—親の養育行動の次元構成および子どもに与える影響について— 日本福祉大学社会福祉論集, 117, 51-71.
- 宮原時彦・北村陽英 (1993). 母親の養育態度と乳幼児の身体発育との関連性 奈良教育大学紀要, 42, 2, 27-36.
- 森下剛 (2001). 乳幼児の母親がもつ家庭外育児サポートに関する研究—私的サポートの機能と育児不安・ストレスとの関係を中心に— 教育方法学研究, 14, 141-156.

Research into Nurturing Attitudes of Mothers —Focusing on attachment styles and self-acceptance of mothers—

TAKEUCHI, T., TAINAKA, H. and KAWANO, N.

Abstract

This study was designed to clarify how attachment styles and self-acceptance of mothers who have infants affect their nurturing attitudes. The participants were 117 mothers who have infants. They answered a questionnaire about “attachment styles”, “self-acceptance”, and “nurturing attitude”. The result shows that the attachment styles affect self-acceptance and that the attachment styles and self-acceptance affect the nurturing attitude. In the self-acceptance factor, accepting themselves as mothers and accepting their own personalities have an effect on nurturing and responding to their own children acceptably. These results suggest the importance of appropriate supports for mothers concerning the problems that mothers themselves have.

【Key words】 Nurturing attitudes, Attachment styles,
Self-acceptance